

# 伊丹公論

## 号外

発行所  
伊丹市立図書館 ことば蔵  
〒664-0895  
伊丹市宮ノ前3-7-4  
☎072-784-8170  
編集  
伊丹公論編集委員会

# 市民とともに図書館日本一

## ことば蔵が Library of the Year 大賞受賞

ことば蔵はこのほど、先進的な活動を実践する図書館などを表彰する「ライブラリー・オブ・ザ・イヤー(LoY)2016」の大賞(図書館日本一)に選ばれました。これもひとえに当館を利用いただいたり、運営に参加いただいたりした市民のみなさんのおかげです。ことば蔵では、感謝の印としてささやかながら受賞記念のブックカバーを配布中(他の受賞記念事業は下段記事参照)。ぜひ、ご来館ください。



交流フロア運営会議から生まれた市民企画「英語で子育て交流会」に参加する親子

原点は100年前

平成24年(2012)にオープンしたことば蔵の原点は、そのちょうど100年前の明治45年(1912)、伊丹市宮ノ前に開設された私立「伊丹図書館」です。大阪医学校(現大阪医科大学)で教授を務めた小林杖吉が、私塾「三余学寮」に併設したものでした。

同館では、「郷土研究伊丹公論」を創刊し、昭和15年(1940)までに計19号を発行しました。伊丹図書館は昭和18年に閉館しましたが、

蔵書4万冊は伊丹市に寄贈。その蔵書の一部は、昭和26年に行基町(今の市立伊丹高校敷地内)に開館した市立図書館に受け継がれました。「公園のような図書館」

市立図書館は昭和47年、千僧(市役所東側)に移転、その地で40年間親しまれました。しかし、蔵書の増加で手狭になったことや中心市街地の活性化のため、平成24年、100年ぶりに出発の地である宮ノ前に移転、市内在住の芥川賞作家・田辺聖子さんが名誉館長に就任し、公募で決まった「ことば蔵」の愛称で開館しました。

開館前、ことば蔵は基本コンセプトを誰かが気軽に訪れることができる「公園のような図書館」とし、その実現方法を探るため、市民参加でLoY2011大賞を受賞した長野

県・小布施町立図書館などを視察。自由に市民が参加し、やりたいことや運営について話し合えるシステムのヒントを見つけました。また、ことば蔵がLoYを獲得し、市民と一緒に日本一の図書館を作ることを目標に据えました。

### 市民発のイベント続々

ことば蔵は、市民の交流拠点とするため、1階に新設した「交流フロア」の活用方法を話し合う運営会議を毎月開催。予約不要でも参加できるようにし、この会議に集まった参加者のアイデアから、今では年間200回を超えるイベントが開催されています。

また、小林の遺志を引き継ぐようと、市民が中心となって「三余学寮」と「伊丹公論」を現代に蘇らせ、伊丹の歴史・文化の発信拠点として活動しています。新たな機能として、受賞した帯を市内の書店で本に巻いて販売する「帯ワンダラプリー」、地元商店主が講師となってプロならでの知識と店の情報を無料で伝える「まちゼミ」などで地域経済にも寄与しています。

### 市民とともに日本一!

LoYは平成18年、学識経験者らでつくるNPO法人「知的資源イニシアティブ」(東京都)が創設。全国3千を超える公立図書館のほか、大学図書館や関連プロジェクトなどから毎年選ばれます。11回目となる今年も、審査基準などが見直されるなか、自薦・他薦の53機関の中から、1次・2次審査により、ことば蔵など4機関が優秀賞に選ばれました。「大賞」を決める最終選考会に向け、ことば蔵は、プレゼンテーションの内容を運営会議で話し合い、シミュレーションも実施、直前まで市民と知恵を出し合いました。そして11月9日、横浜市の会場で伊丹市民も駆けつけるなか、「創造的な活動を市民と共に実践している」点が高く評価され、ことば蔵が大賞を受賞。ついに「図書館日本一」の栄誉を市民とともに勝ち取りました。表彰状と楯はことば蔵交流フロアで展示しています。ぜひ、ご覧ください。

藤原保幸市長の話 伊丹にとって最大の強みである「市民力」で勝ち取った。化をことば蔵の伝統として継承したのだから。その結果が「LoY大賞」になったのではないかな。私たちがことば蔵を通して見た感じたり考えたりしている。いわゆる五官の活動はことば蔵によって行われる。だから、ことば蔵が生き生きとしている。行こう、ことば蔵へ



ことば蔵名誉館長 芥川賞作家 田辺聖子

このたび、わが伊丹の市立図書館「ことば蔵」が「ライブラリー・オブ・ザ・イヤー」に県内で初めて選ばれたことは嬉しくもあり、誇らしい限りです。おめでとうございます。

スタッフのみなさんが利用者とともに年間どんな催事を展開されているのかを知るのには楽しいことです。ことば蔵の活動には、単なる読書推進活動だけでなく、根源的なことばの大切さまで掘り下げた

### 伊丹文化への受賞

畏敬の念をもって柔軟な形で運営できたのでしよう。その蔵の中に秘められたところをみんなが味わい、ふつとともえたる新しい伊丹文化のエネルギーに醸成したいと思えます。今回の受賞は伊丹文化の土壌が豊かな表れと楽しく思いました。



「ことば文化都市伊丹」提唱者「伊丹俳壇」選者 坪内稔典

ところが、伊丹市はきわめて例外だ。ことば文化都市を標榜し、ことば特区になって学校にことば科を設けた。ことば蔵もできた。江戸時代の酒蔵を中心に栄えた文



LoY受賞事業 4周年記念

LoY大賞受賞を記念し、次の事業を、ことば蔵1階で行います。いずれも無料。当日直接、会場へ。「受賞祝ブックカバー配布」来館者先着5千人に、特製のブックカバーをプレゼント。

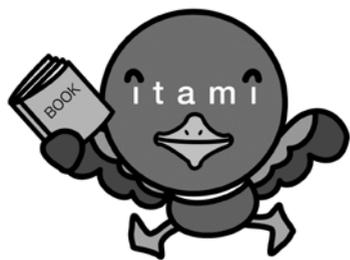
【記念横断幕をつくらう】12月28日までに来館すると、横断幕にメッセージを記入できます。  
【記念シンポジウム】来年1月21日(土)午後4時。LoY2016優秀賞を受賞した大阪産業労働資料館(エル・ライブラリー)の谷合佳代子館長らを迎え、両館による合同記念トークイベントなど。

【記念コンサート】来年1月28日(土)午後3時半。アコースティックギターリスト・わたなべゆうさんによる、絵本と音楽を融合させた生公演。



受賞記念のブックカバーと横断幕

「郷土研究伊丹公論」は、私立伊丹図書館を開設した小林杖吉(筆名「丹城」)が、昭和11年(1936)1月20日に創刊し、19号まで発行された地域紙。ことば蔵では、伊丹公論を73年ぶりに復刊し、伊丹の歴史・文化を全国に発信するため、市民と共に発行しています。



伊丹市マスコット たみまる

# 受賞で士気上がる 運営メンバーたち

図書館運営に市民の意見を取り入れるため、開館前に設置したのが「交流フロア運営会議」です。誰でも出入り自由なオープンな会議で、毎月第1水曜午後6時半から8時まで開催しています。

ことば蔵でやってみたいことなどを自由に話し合い、「カエボン」など年間200回を超えるイベントが開催されています。また、「伊丹公論」を復刊させるためのプロジェクトにもつながりました。

この運営会議を通してイベントを実現させた企画者などから、活動内容や魅力などについて寄稿いただきました。

## 「伊丹公論」編集会議



「ビッグニュース・タンジヨー先生、ことば蔵が日本一の大賞を受賞しましたよ」、喜びが編集仲間に瞬間に広がった。「ことば蔵」とは、ことば文化都市を標榜する伊丹市の図書館のことだ。俳聖上鳥鬼貫を生んだ伊丹は万葉の昔から歌枕の聖地として名を知られた。小学校では美しい言葉と美味しくない言葉など、独特のことば科の授業が行われる。

「伊丹公論」は昭和11年に創刊された郷土新聞である。主筆の小林杖吉(筆名:丹城)は鳥取出身の大阪大学医学部教授。伊丹を終の棲家と決め、明治45年、阪神間初の私立図書館を作った。図書収集には、大隈重信らが協力した。その傍ら郷土紙「伊丹公論」を発行、その後廃刊となったが、ことば蔵誕生

## ふんさと愛する市民力

の翌平成25年、志を継いで市民の手で復刊、通巻33号を数えている。

タンジヨー先生の目指したふるさとを愛する豊かな市民力の結果、これこそ伊丹のかけがえない未来へ続く宝であろう。「伊丹公論」をつくる楽しい編集仲間にあなただもぜひどうぞ。(郷土史研究者 森本啓一)

## 交流フロア運営会議



でも、毎月欠かさず続けていると、奇跡のような伊丹の逸材が現れる。「図書館で花火大会がしたいです」「ここでお酒を飲みたいんやけど」など。普通の図書館なら、職員がに

交流フロア運営会議。まず名前がカタい。こんな会議はだいたいつまらないと相場は決まっている。会議メンバーはいつも流動的だし、職員と数人だけというさみしい日もあった。それ

## まるで大喜利

地元で暮らす人たちも、毎回15人くらいが輪になって「ここが楽しくなるには」というお題に挑んでいる。

名前が固くて参加をためらっていた皆さん、そんな会議なので気軽に遊びに来てください。ここが日本の図書館の最前線になりました。(プランナー 若狭健作)

## カエボン



わたし企画している「カエボン」の活動も運営会議から生まれました。自分が感動した本や誰かに読んでもらいたい本に、メッセージを書いた「カエボン」を付けて本棚に並べます。その1冊を他の誰かが持ってきた本と交換できる、それが「カエボン」です。貸出記録や期限などありません。あくまでも利用いただくみなさんの善意で成り立っている本棚です。

わたしが企画している「カエボン」の活動も運営会議から生まれました。自分が感動した本や誰かに読んでもらいたい本に、メッセージを書いた「カエボン」を付けて本棚に並べます。その1冊を他の誰かが持ってきた本と交換できる、それが「カエボン」です。貸出記録や期限などありません。あくまでも利用いただくみなさんの善意で成り立っている本棚です。

## おすすめの1冊

断然、読みたくなります。

昨年は、中央公民館、図書館南・北分館にもカエボン棚が設置されて、市内各所でカエボンの輪が広がっています。「カエボン」は見知らぬ近所さん同士が一冊の本を、おすすめし合って交流できる、ゆるく温かい取り組みです。(古書店主 三誠由希子)

テーマに沿った本を紹介し合います。自分の知らなかった本を教えてもらえたり、読みたいジャンルが新たに広がったりします。新刊本や流行の本は、ブックレビューを読めば出会えるし、インターネットで簡単に本の情報が手に入ります。でも、誰かに教えてもらった、その人の感想に共感できた本の方が、

## ビブリオバトル



私がことば蔵に係わったのは、オープン前に、1階交流フロアの使い方を考えるため、ことば蔵から声をかけていただいたのがきっかけです。

私がことば蔵に係わったのは、オープン前に、1階交流フロアの使い方を考えるため、ことば蔵から声をかけていただいたのがきっかけです。人を通して本を知るイベントをしようと、数人のバトルが

## 人を通して本を知る

プレイベントでは、吉野さんからビブリオバトルを紹介いただき、みんなで体験。その場で自然に部員ができ、開催ごとに仲間も増え、現在にいたっています。その輪は市内の学生たちにも広がっています。

プレイベントでは、吉野さんからビブリオバトルを紹介いただき、みんなで体験。その場で自然に部員ができ、開催ごとに仲間も増え、現在にいたっています。その輪は市内の学生たちにも広がっています。今回、大賞になって、運営会議の面白さを再び感じました。大切さを再び感じました。これからも、いつでも家族を迎えるように接してくれる優秀であたたかいことば蔵スタッフのサポートを受けながら、無理なく楽しく継続しつつ、更にやりたいことをこの場で実現していきたいと思っています。だってここは、みんなの公園なんですから！(主婦 村上有紀子)

## zine ワークショップ



私は、開館当初より、仲間とzineという手作りの本を作る部活動を運営しています。主な活動はzine作りのワークショップを2カ月に1度企画することです。zine専

私は、開館当初より、仲間とzineという手作りの本を作る部活動を運営しています。主な活動はzine作りのワークショップを2カ月に1度企画することです。zine専

## 作った本が図書館に並ぶ

思いやアイデアを表現、実現できる場があり、本や人との出会い、交流が生まれることば蔵。様々な形で利用でき、出会いも待っている図書館であることを、もっと多くの人に知ってほしいし、訪れてほしいです。ぜひ、zineのワークショップにご参加ください。(ウェブデザイナー 鹿嶋孝子)

があり、それぞれ思いのzineを作って帰られます。作品はことば蔵でも展示していますので、ぜひご覧ください。本を読む、借りるだけでなく、本を作る、作った本が図書館に並ぶという画期的な取り組みを、公立図書館で実現できることは本当に素晴らしいことです。

## コトバシティ英語読解講座



学校英語教育から引退したのが60歳で、終の棲家に伊丹を選び、「ことば蔵」と出会いました。この図書館が「打出の小槌」となって、二つの幸せを打ち出してくれました。

一つは、「コトバシティ英語読解講座」です。コンセプトは、「ことばと表現の面白さ、再発見」、「日本文学を英語で味読快読」、「英語を精読和訳深化論」。本年12月で20回となります。

I'm here to achieve my lifelong ambitions.  
ここで私は一生涯の大望を実現したいのです

す。毎月1回90分、約40人の20代から90歳までの受講者が熱心に聴講されています。もう一つの幸せは、京都大学2015年度研究生としての「学び」です。大学で「理論」を学び、英語講座が「実践」の場となつていきます。和食に喩えれば、器が「ことば蔵」で、食材が講座内容になります。今回の大賞受賞は、ことば蔵職員の熱意と「運営会議」出席者の企画力との融合の賜物です。(元高校英語科教員 瀧昌央)